

コロナ禍の仕事・社会とのつながり満足度と インターネット

前 田 至 剛

The Relationship between Internet usage and Satisfaction
with Job and Social Connection on COVID-19 related crisis.

Noritaka MAEDA

コロナ禍の仕事・社会とのつながり満足度と インターネット

前 田 至 剛

The Relationship between Internet usage and Satisfaction
with Job and Social Connection on COVID-19 related crisis.

Noritaka MAEDA

要 旨

本稿は新型コロナウイルスの感染が拡大することにより、対面的接触を制限しなければならない状況下において、インターネットの活用を含む、仕事や社会とのつながりに関する満足度に与える要因を考察するために、内閣府による「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」の二次分析をおこなった。その結果以下の点が明らかとなった。仕事の満足度については、事務職に比べて、営業・販売やサービスの職にある者は満足度が低く、コロナ前と比較した場合の満足度の低下の幅も大きかった。そしてテレワークの実施（50%以上）は、他の要因をコントロールしてもなお、仕事の満足度を上昇させること、さらにコロナ禍前後の仕事満足度の低下幅も縮小させることがわかった。他方社会とのつながり満足度については日常的なSNS利用、オンラインでの情報発信や交流経験が、満足度を上昇させることがなかった。

キーワード：コロナ禍, インターネット, 満足度, 仕事, 社会とのつながり

1. 問題の所在

本稿の目的は新型コロナウイルスの感染が拡大し、対面的接触を制限するなど社会生活に制限が求められる状況（以下、コロナ禍）において、仕事や社会とのつながりに関する満足度に影響を与える要因を探り、さらにインターネットが果たした役割について明らかにすることである。

新型コロナウイルス（以下、Covid-19）は新興感染症のなかでも、社会生活とりわけ人々の対面的接触に与える影響が極めて大きいものとなった。それはCovid-19の潜伏期間、感染力を保持する時期、重症化率などの特徴に起因している。Covid-19は飛沫や接触等により人から人へ感染し、感染が成立してから発症するまで最大2週間程度と潜伏期間が比較的ながい（Guan et al. 2020）。また自覚症状があらわれる前であっても（さらにはたとえ自覚症状がなくとも）他人に感染させる可能性がある（He et al. 2020）。そのため感染拡大を抑止するためには、常にすべての人が感染者であるとの想定のもとに社会生活を営むことが求められるため、人と人との接触を減らさなければならない。

そして高齢者や基礎疾患のある感染者が重症化しやすい一方、多くの軽症または無症状の感染者は移動し、普段通りの社会生活を営むことになる。重症化率の高い感染症は、感染者が重症化することで移動がさまたげられ、比較的感染が広まりにくい。皮肉なことにCovid-19は重症化率が一定に抑えられていることから極めて蔓延しやすい特徴を備えているといえる。感染拡大を抑止することが容易ではないため、より一層対面的接触を減少させる社会的圧力が生じている。

他方、人類は歴史上数々の新興感染症によるパンデミックを経験してきたが、インターネットが普及して以降にここまで大規模な感染拡大を経験したのは、今回のCovid-19がはじめてである。もちろんインターネットは通信手段の一つにすぎず、ましてや人々が社会関係を構築・維持する数多ある手段のごく一部にすぎない。それでも今回のコロナ禍では、テレワークやビデオ通話などが幅広く利用されたのも事実である。コロナ禍において、あるいはまた今後の別種の感染症や自然災害などにより社会的接触が制限される状況において、インターネットが果たし得る役割を考えることには一定の意義があるだろう。

筆者は現在慶應義塾大学先端ウェブアーキテクチャ・ラボの一員としてNTTサービスエボリューション研究所との共同研究「連鎖的デジタルソーシャルキャピタル形成に向けた研究」をおこなっている。当研究プロジェクトの一環としても、コロナ禍におけるインターネットを用いたコミュニケーションが社会関係に与える影響について調査分析する予定であるが、調査の精度を高めるために既往調査の結果を検討することが必要不可欠である。

そこで本稿では、内閣府が2020年5月25日～6月5日におこなった「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」（以下、内閣府調査）の個票データの2次分析を探索的におこなうことで、コロナ禍における仕事と人々の社会的接触についての満足度、さらにはインターネットが果たした役割について考察する。同調査がおこなわれたのは、

2020年4月7日～5月25日まで発令されていた緊急事態宣言が解除された直後であるため、回答にはかなり厳しい社会生活上の制約があった時期が反映されており、貴重なデータといえるだろう。内閣府も単純集計やいくつかのクロス集計を公表しているが、より詳細な分析が求められる。

なお、今回分析対象とした調査は第1回目であり、2020年末には第2回目の調査が実施されているが、本稿執筆時点では個票データが提供されていないため、第1回目調査のみを分析の対象とした。同調査の概要は内閣府（2020）によれば以下のとおりである。

○調査方法：インターネット調査（国内居住のインターネットパネル登録モニター）

○回収数：10,128

○調査期間：5月25日～6月5日

（5月25日～29日に半数を回収し、6月1日～5日に残りの半数を回収）

3月14日：改正新型インフルエンザ等対策特別措置法施行

4月7日：緊急事態宣言発令、5月14日：39県で緊急事態宣言を解除

5月25日：全ての都道府県で緊急事態宣言を解除

○回収数の割当（サンプル数の設計）

・性別・年齢階級別（5歳毎）で同数を均等に割当（24区分×422人＝10128）

※年齢は「15～19歳」から「70歳以上」までの12区分×性別2区分＝24区分

・地域別7区分で人口比例で割当

○回収数の内訳（主な属性別）

【就業者】6,685人 【子育て世帯】 2,168人 ※子供が18歳未満

【学 生】1,035人 【シニア ※60歳以上】2,532人（内閣府 2020）

同調査では、生活の楽しさ、仕事、社会とのつながり（交友など）の満足度について、10点＝非常に満足、0点＝全く満足していない（5は「どちらともいえない」が想定されていると思われる）の11段階で回答を得ている。

図1は感染拡大前と後の各満足度の平均および減少幅を示す。すべての満足度が低下しており、「生活の楽しさ」の満足度をのぞくと減少幅が大きいのは、「社会とのつながり」「仕事」「健康状態」「子育て」の順であることがわかる。「生活の楽しさ」は減少幅がもっとも大きい、コロナ禍において全般的にたゞよう陰鬱な雰囲気や各種満足度、その他多くの要因による複雑な影響のもと構成されていると推察されるため、本稿の目的から考えて次の二つの満足度に焦点を絞ることとした。それは「仕事」と「社会とのつながり」の満足度である。なぜなら、仕事の満足度はコロナ禍において注目があつまったテレワークと関連すること、社会とのつながりもSNSやzoom等インターネット利用との関連が比較的特定しやすいと推論できるからである。

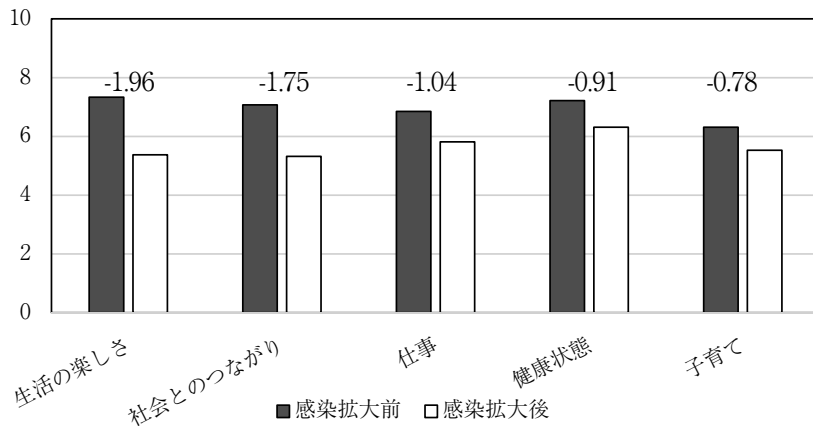


図1 感染拡大前／後の各種満足度

2. 共時的分析：コロナ禍「での」仕事の満足度

まず仕事の満足度に影響を与える要因について検討する。コロナ影響下における仕事満足度について、以下では各種回答にもとづくグループごとの平均値を示す¹⁾。本節で検討する分析結果は、あくまでコロナ影響下での満足度である。学歴や従業上の地位などは、コロナによる影響の有無にかかわらず、仕事満足度に影響している。とはいえ、そのような傾向がコロナ禍においても存在しているのかどうかをまず検討する必要があるだろう。本節の分析はコロナ禍という社会状況のなかで、様々な社会的カテゴリーに属する人々が、仕事満足の高低に関していかなるの布置にあるのかが明らかとなる。コロナ禍の仕事満足度についての、いわば共時的分析といえる。

性別については、男性のほうが有意に満足度が高かった（表1）。

年齢に関しては、20～39歳のほうが40～59歳よりも有意に満足度が高かったが、その他の年齢階層同士に有意差はなかった（表2）。

表1 性別×コロナ影響下での仕事満足度

	平均値	N	SD
男性	5.91	3,697	2.26
女性	5.74	2,821	2.38
	5.83	6,518	2.32

** p<.01 (Mann-Whitney's U test)

表2 年齢×コロナ影響下での仕事満足度

	平均値	N	SD
19歳以下	5.66	85	2.71
20～39	5.97	2,594	2.31
40～59	5.69	2,782	2.32
60歳以上	5.89	1,057	2.28
合計	5.83	6,518	2.32

*** p<.001 (Kruskal-Wallis test)

1) なお、仕事の満足度について検討する際、分析対象を正規および非正規雇用、会社役員、自営業に限定し、学生、無職、さらには内職・在宅ワークを除外した。内職・在宅ワークを除外したのは、コロナ禍における社会的接触減少の影響を元からあまり受けない人が多く含まれると推察されるからである。

では学歴との関連はどのようなものか。

表3にあるとおり、学歴に関しては、＜中、高、専門学校卒＞および＜専門学校卒、短大・高専卒＞との間には有意差がないものの、これら2グループにくらべ、＜大卒・大学院卒＞のほうが有意に満足度が高い。

表3 学歴×コロナ影響下での仕事満足度

	平均値	N	SD
中学卒	5.20 a	127	2.69
高等学校卒	5.64 a	1,698	2.35
専門学校卒	5.54 ab	865	2.35
短大・高専卒	5.63 b	599	2.42
大学卒	6.04 c	2,882	2.23
大学院修了	6.34 c	347	2.16
合計	5.83	6,518	2.32

アルファベットは多重比較の結果を示し、同じアルファベットがふられたカテゴリー同士は同一グループ（有意差なし）有意水準については個々に異なるが最大でもすべて $p < .01$ (Kruskal-Wallis test)

次に職種との関連では、サービス業の低さが目立ち、運搬および農林漁業との間を除けばすべての職種よりも有意に満足度が低い。また営業も事務にくらべて有意に満足度が低かった（表4）。

表4 職種×コロナ影響下での仕事満足度

	平均値	N	SD
サービス	5.32 a	933	2.44
運搬	5.57 a	211	2.52
生産工程	5.74 bc	520	2.26
営業・販売	5.77 b	1,014	2.24
専門・技術	6.05 bc	1,493	2.28
農林漁業	6.05 abc	55	2.75
事務	6.07 c	1,482	2.19
その他	5.80 bc	810	2.39
合計	5.83	6,518	2.32

多重比較の結果表示については表3に同じ。
有意水準については個々に異なるが最大でもすべて $p < .05$ (Kruskal-Wallis test)

また、従業上の地位との関連では、正規雇用労働者の満足度が会社役員との差をのぞけば、どのカテゴリーよりも有意に満足度が高かった。会社役員、非正規、自営の間に有意な差はなかった（表5）。

表5 従業上の地位×コロナ影響下での仕事満足度

	平均値	N	SD
正規雇用	5.99 a	3,909	2.24
会社役員	5.88 ab	221	2.36
非正規雇用	5.59 b	1,802	2.39
自営業	5.55 b	586	2.49
合計	5.83	6,518	2.32

多重比較の結果表示については表3に同じ。有意水準については個々に異なるが最大でもすべて $p < .01$ (Kruskal-Wallis test)

世帯収入²⁾との関連では、収入が多いほど有意に満足度が高かった(表6)。

表6 世帯年収×コロナ影響下での仕事満足度

	平均値	N	SD
200万円未満	5.06	505	2.45
200～600万円未満	5.73	3,054	2.31
600万円以上	6.07	2,959	2.26
合計	5.83	6,518	2.32

多重比較の結果すべてのカテゴリー間で有意差あり
p<.001(Kruskal-Wallis test)

次にテレワーク実施状況との関連を検討する。コロナ禍においては感染拡大を防止する観点から、職場や通勤における人と人との接触を減らす目的で、インターネットを含む各種メディアを活用し出勤せずに働くスタイルであるテレワークに注目が集まった。テレワークを50%以上を経験した人ほど有意に満足度が高い傾向にあった(表7)。

表7 テレワーク実施状況×コロナ影響下での仕事満足度

	平均値	N	SD
テレワーク50%以上	6.24	1,377	2.24
テレワーク50%以下	5.72	5,141	2.32
合計	5.83	6,518	2.32

p<.01 (Mann-Whitney's U test)

ではここまでみてきた各要因のうち何が仕事満足度を規定するのだろうか。表8はコロナ影響下の仕事満足度を規定する要因を予測する重回帰分析の結果である。モデルの適合度が低く参考程度と見做さざるを得ないが、傾向としては興味深い。学歴が高いことや収入が多いことは満足度を上昇させ、事務職に比べて営業・販売、サービスの職にあることは満足度を低下させていた。そしてテレワークが50%以上あることは、それだけでも満足度を上昇させるようだ。

2) 分析対象となっているのは、主たる家計支持者のみならず、その配偶者などがパート・アルバイトをおこなっている場合も含む。この場合、収入と仕事の満足度の関係は、くらし向き全般とかかわる世帯収入との相関をみたほうが妥当であると考え、世帯収入との関連を検討した。

表8 コロナ影響下の仕事満足度を規定する
要因を予測する重回帰分析

	偏回帰係数	標準化係数 β
年齢	-0.003	-0.021
性別（基準：男性）		
女性	-0.020	-0.004
教育年数	0.059	0.051 ***
収入（基準：600万円以上）		
200万以下	-0.783	-0.090 ***
200-600万	-0.231	-0.050 ***
職種（基準：事務）		
営業・販売	-0.347	-0.054 ***
サービス	-0.524	-0.079 ***
生産工程	-0.146	-0.017
専門・技術	-0.080	-0.014
運搬	-0.276	-0.021
農林漁業	0.254	0.010
その他	-0.112	-0.016
従業上の地位（基準：正規）		
非正規	-0.062	-0.012
役員	-0.124	-0.010
自営	-0.188	-0.023 †
テレワークあり	0.325	0.057 ***
定数		5.453
N		6,518
修正済みR2乗		0.029

*** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$, † $p < 0.1$

3. 通時的分析：コロナ禍「による」仕事の満足度変化

同調査では、Covid-19の感染拡大による影響前と調査時点での満足度を問うていることから、コロナ禍による満足度の減少幅を算出することができる。これをもちいて、各カテゴリー別に仕事満足度の減少幅がどのように異なるかを検討する。これは、コロナ前と後での働き方や経済活動の変化を反映した、いわば通時的分析である。

まず性別については、女性のほうが減少幅が大きかった（表9）。この点は共時的分析と同様であった。

表9 性別×コロナ禍による仕事満足度低下幅

	平均値	N	SD
男性	-0.87	3,697	2.06
女性	-1.13		
	-0.98	6,518	2.22

*** $p < .001$ (Mann-Whitney's U test)

次に年齢については共時的分析と異なり、20歳以上に限って言えば、年齢が高くなるほど満足度の減少幅が大きかった（表10）。

表10 年齢×コロナ禍による仕事満足度低下幅

	平均値	N	SD
19歳以下	-0.99 abc	85	2.74
20～39	-0.72 a	2,594	2.26
40～59	-1.04 b	2,782	2.14
60歳以上	-1.46 c	1,057	2.21
合計	-0.98	6,518	2.22

多重比較の結果表示については表3に同じ。p<.001
(Kruskal-Wallis test)

学歴との関連は、短大・高専卒よりも大卒や大学院修了のほうが、有意に減少幅が少ないが、大卒と大学院修了の間には有意差がない。ほかに有意であったのは、専門学校卒－大学院修了と専門学校卒－大学院修了および高卒－大学院修了との差であった（表11）。共時的分析では、大卒以上とそれ以外の間に概ね差がみられたが、減少幅についてはやや異なる傾向がみてとれる。

表11 学歴×コロナ禍による仕事満足度低下幅

	平均値	N	SD
中学卒	-1.28 ab	127	2.33
高等学校卒	-1.05 a c	1,698	2.20
専門学校卒	-1.12 a c	865	2.23
短大・高専卒	-1.23 a	599	2.41
大学卒	-0.88 bc	2,882	2.20
大学院修了	-0.62 b	347	1.98
合計	-0.98	6,518	2.22

多重比較の結果表示については表3に同じ。有意水準については個々に異なるが最大でもすべて p<.05 (Kruskal-Wallis test)

職種との関連は、サービス業が運搬を除くすべての職種にくらべ満足度の減少幅が大きく、事務は運搬および農林漁業をのぞけばもっとも減少幅が少なかった（表12）。接客をとまなう職の多いサービス業が低くなるのは共時的分析と同様であるが、営業は必ずしも同じ傾向ではない。コロナ禍によるサービス業へのダメージが、満足度の減少幅をより大きくしたと推察される。

表12 職種×コロナ禍による仕事満足度低下幅

	平均値	N	SD
サービス	-1.46 a	933	2.59
運搬	-1.11 abc	211	2.22
営業・販売	-1.04 b	1,014	2.28
専門・技術	-1.02 b	1,493	2.15
その他	-0.98 b	810	2.25
生産工程	-0.81 b	520	1.99
事務	-0.65 c	1,482	2.00
農林漁業	-0.64 abc	55	2.05
合計	-0.98	6,518	2.22

多重比較の結果表示については表3に同じ。有意水準については個々に異なるが最大でもすべて p<.01(Kruskal-Wallis test)

従業上の地位との関連は、正規雇用の減少幅が有意に小さい点は共時的分析と同じであるが、会社役員との間にも差があった点が共時的分析と異なる。会社役員はコロナ前に満足度が高い傾向にあり、コロナの影響により大きく低下したことが関係していると考えられ、相対的に剥奪感が強かったのだと推察される（表13）。

そして年収との関連では、算出した平均値に一定の差があったものの、検定の結果としては有意差が認められなかった。同調査で提供されている個票データが、3区分の年収階層のみであるからかもしれないが、共時的分析では同じ区分でも有意差が認められた点から考えると、コロナ禍が仕事満足度の低下におよぼす影響の程度は、それほど年収に左右されずに引き起こされているのかもしれない。

ではここまでみてきた、各要因のうち何が独立に仕事満足度の低下を引き起こすのだろうか。表14は、コロナ禍による仕事満足度の低下幅を規定する要因を予測する重回帰分析の結果である。正の値は満足度低下を抑制しむしろ上昇させる要因ということになる。逆に負の値は低下を引き起こす要因ということになる。モデルの適合度はやはり低く参考程度とせざるを得ないが、それでも共時的分析よりは若干適合度が高い。

共時的分析と異なり年齢が高いこと、女性であることは減少幅を大きくする傾向にある一方、教育年数は有意な影響を及ぼさなかった。職種との関連では、事務職に比べて、営業・販売およびサービスの職種であることが満足度の低下を引き起こす点は共時的分析と同様であるが、ここ

表13 従業上の地位×コロナ禍による仕事満足度低下幅

	平均値	N	SD
正規雇用	-0.75	3,909	2.07
会社役員	-1.44 a	221	2.44
非正規雇用	-1.28 a	1,802	2.35
自営業	-1.42 a	586	2.47
合計	-0.98	6,518	2.22

多重比較の結果表示については表3に同じ。有意水準については個々に異なるが最大でもすべて $p < .01$ (Kruskal-Wallis test)

表14 コロナ影響下の仕事満足度低下を規定する要因を予測する重回帰分析

	偏回帰係数	標準化係数 β
年齢	-0.014	-0.092 ***
性別（基準：男性）		
女性	-0.215	-0.048 **
教育年数	0.014	0.012
職種（基準：事務）		
営業・販売	-0.462	-0.075 ***
サービス	-0.668	-0.105 ***
生産工程	-0.195	-0.024 †
専門・技術	-0.441	-0.083 ***
運搬	-0.436	-0.035 **
農林漁業	0.246	0.010
その他	-0.197	-0.029 *
従業上の地位（基準：正規）		
非正規	-0.062	-0.012 **
役員	-0.124	-0.010 ***
自営	-0.188	-0.023 ***
テレワークあり	0.325	0.057 **
定数		-0.063
N		6,518
修正済みR2乗		0.035

*** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$, † $p < 0.1$

（通時的分析）では専門・技術および運搬の職種であることが満足度低下の幅を拡大する影響を及ぼす点が異なっていた。また、従業上の地位に関しては、正規雇用にくらべて、非正規・役員・自営業の場合に低下の幅が拡大している点も異なっている。したがってコロナ禍による満足度の低下は、職種と従業上の地位両方が複合的に影響し、引き起こされているといえるのではないだろうか。

そしてテレワークが50%以上であることは、独立して満足度を上昇させる効果があり、その効果には一定の強さがありそうだ。むろん、あらゆる仕事においてテレワークが可能なわけではないが、パンデミックによる「仕事」に一定の制約が避けられない場合にも満足度の低下を食い止める効果があると推察される。

4. コロナ禍前／後の社会とのつながり満足度：共時的・通時的分析

表15 年齢×社会とのつながり満足度

	コロナ前		コロナ禍		低下幅		N
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
19歳以下	6.26 ab	2.72	5.47 ab	2.40	-0.79	2.63	85
20～39	7.02 b	2.19	5.44 b	2.28	-1.58 a	2.62	2,594
40～59	6.84 a	2.18	5.31 b	2.19	-1.53 a	2.47	2,782
60歳以上	7.25	2.22	5.15 a	2.17	-2.10	2.55	1,057
合計	6.97	2.20	5.34	2.23	-1.63	2.56	6,518

多重比較の結果表示については表3に同じ。有意水準については個々に異なるが最大でもすべて $p<.05$ (Kruskal-Wallis test)

本節以降は、内閣府調査で回答を得ている交友などによる社会とのつながりの満足度に影響を与える要因について検討する³⁾。なお、これ以降はコロナ禍前と後およびコロナ前からの低下幅（表中は単に「低下幅」と記述）を併記する。

年齢との関連では、コロナ前は60歳以上がもっとも満足度が高く続いて20～39歳が満足度が有意に高い。それがコロナ禍では、60歳以上の満足度の低さが目立ち、コロナ前後の低下幅ではおおむね年齢の上昇により低下の幅が拡大している（表15）。

3) 社会とのつながりの満足度に関する一連の分析においても、対象者を仕事の満足度と同様に正規および非正規雇用、会社役員、自営業に限定した。

表16 性別×社会とのつながり満足度

	コロナ前		コロナ禍		低下幅		N
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
男性	6.87	2.14	5.40	2.19	-1.47	2.44	3,697
女性	7.10	2.29	5.26	2.29	-1.85	2.68	2,821
合計	6.97	2.20	5.34	2.23	-1.63	2.56	6,518

p<.01 (Mann-Whitney's U test)

性別については、コロナ前は女性のほうが満足度が高かったものの、コロナ禍では女性のほうが満足度がむしろ低く、当然低下の幅も大きくなった（表16）。

表17 世帯収入×社会とのつながり満足度

	コロナ前		コロナ禍		低下幅		N
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
200万円未満	6.32	2.46	5.05 a	2.37	-1.27	2.41	505
200～600万円未満	6.87	2.20	5.30 ab	2.24	-1.57	2.55	3,054
600万円以上	7.19	2.13	5.43 b	2.20	-1.75	2.58	2,959
合計	6.97	2.20	5.34	2.23	-1.63	2.56	6,518

多重比較の結果表示については表3に同じ。有意水準については個々に異なるが最大でもすべて
p<.01(Kruskal-Wallis test)

表18 従業上の地位×社会とのつながり満足度

	コロナ前		コロナ禍		低下幅		N
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
正規雇用	6.94 a	2.14	5.40 a	2.19	-1.55 a	2.52	3,909
会社役員	7.48	2.22	5.18 ab	2.23	-2.29	2.91	1,802
非正規雇用	6.96 a	2.31	5.22 bc	2.28	-1.74 a	2.56	221
自営業	7.02 a	2.25	5.38 a c	2.33	-1.65 a	2.56	586
合計	6.97	2.20	5.34	2.23	-1.63	2.56	6,518

多重比較の結果表示については表3に同じ。有意水準については個々に異なるが最大でもすべて
p<.05(Kruskal-Wallis test)

収入との関係は、コロナ前は明確に収入が高い方が満足度が高い。それがコロナ禍でもおおむね同じであるが、200万円未満と600万円以上の間のみ有意差がある。他方で低下の幅のほうは3区分すべてにおいて有意差があり、むしろ世帯年収が多いほうが減少幅が大きくなっている。コロナ前はより大きかった社会とのつながり満足度の年収による差が、コロナ禍では縮まったと考えられ、結果としてコロナ前に満足度上位だった収入階層のほうが、より相対的剥奪を感じやすい状態になったと推察される。（表17）。

従業上の地位との関連は、コロナ前は会社役員のみ他のカテゴリーよりも有意に満足度が高い一方、コロナ禍の満足度では正規雇用のほうが非正規より満足度が高い点のみが有意である。一方、満足度の低下の幅は会社役員が他と比べた差異のみが有意であった（表18）。

表19 学歴×社会とのつながり満足度

	コロナ前		コロナ禍		低下幅		N
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
中学卒	6.43 a	2.31	5.36 ab	2.30	-1.07 a	2.11	127
高等学校卒	6.77 ab	2.33	5.25 a	2.24	-1.52 a	2.55	1,698
専門学校卒	6.86 ab	2.24	5.36 ab	2.24	-1.50 a	2.46	865
短大・高専卒	6.98 abc	2.23	5.21 a	2.27	-1.77 ab	2.68	599
大学卒	7.12 cd	2.12	5.36 a	2.23	-1.77 b	2.62	2,882
大学院修了	7.17 b d	1.94	5.81 b	2.00	-1.36 ab	2.14	347
合計	6.97	2.20	5.34	2.23	-1.63	2.56	6,518

多重比較の結果表示については表3に同じ。有意水準については個々に異なるが最大でもすべて $p<.05$ (Kruskal-Wallis' test)

次に学歴との関連は、コロナ前は大卒者の満足度の高さは、短大・高専卒・大学院修了者を除いてすべてのカテゴリーとの間で有意差があった。大学院修了者の平均値は高いが、有意差があったのは中卒者との間だけである。他方、コロナ禍の満足度では大学院卒といくつか学歴のみ有意な差があり、大学院修了者の満足度の高さが目立つ。大卒者の満足度が低下して他と差異がなくなったといえるだろう。それを反映して、低下の幅については、大卒者が高卒・専門学校卒・中卒者にくらべて有意に低下の幅が大きかった（表19）。

表20 SNS×社会とのつながり満足度

	コロナ前		コロナ禍		低下幅		N
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
毎日SNS利用	7.18	2.22	5.35	2.31	-1.83	2.70	3,932
SNS利用「ときどき」以下	6.67	2.14	5.33	2.11	-1.34	2.30	2,586
合計	6.97	2.20	5.34	2.23	-1.63	2.56	6,518

** $p<.01$ *** $p<.001$ (Mann-Whitney's U test)

では、インターネット利用との関連はどうだろうか。同調査ではSNSの利用状況と、コロナ禍において、オンラインでの発信（YouTube等）やオンラインでの交流（zoom等）を新たに挑戦したかどうかについて問うている。SNSについては、「毎日」「ときどき」「たまに」「利用していない」の4件法で尋ねているが、ここでは利用頻度「毎日」とそれ以外（「ときどき」以下）に分けて分析をおこなった。コロナ前はSNSを毎日利用している人のほうが、有意に社会とのつながり満足度が高かった。コロナ禍においても、SNSを毎日利用している人のほうが有意に満足度が高かったが、その差はわずかなものになった。したがってコロナ前後の低下幅についてはSNS利用者のほうが大きく下げている（表20）。

表21 オンラインでの発信・交流×社会とのつながり満足度

	コロナ前		コロナ禍		低下幅		N
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
取り組んだ	7.53	2.22	5.37	2.36	-2.16	2.88	821
取り組んでいない	6.89	2.19	5.34	2.21	-1.56	2.50	5,697
合計	6.97	2.20	5.34	2.23	-1.63	2.56	6,518

n.s. not significant, *** p<.001 (Mann-Whitney's U test)

また、オンラインでの発信や交流については、コロナ前に満足度が高かった人ほど、コロナ禍でオンラインでの発信や交流に取り組んでいた。ところが、コロナ禍における満足度については、オンラインでの取り組みの有無による有意差がなかった。それを反映して、低下の幅が大きい人ほどオンラインでの発信・交流に取り組んでいた（表21）。

ではここまでみてきた各要因のうち、何がコロナ禍における社会的つながりの満足度を左右するのであろうか。まずコロナ禍における共時的影響については、仕事の満足度同様重回帰分析をおこなったが、モデルの適合度が極めて低く参考程度にすらならない結果であった。そして減少幅については、仕事の満足度とテレワークの関係と同じ方法ではインターネットによる効果を検討することができないため分析をおこなわなかった。仕事の満足度の低下幅に対するテレワーク実施状況が与える影響は、テレワークの実施経験が満足度の判定に対し時間的に先行しており、かつテレワークの実施が調査対象者の裁量の範囲にない外在的要因によって決まる。逆にいえば、仕事の満足度が低い、あるいは下がったからといって、労働者の意思で簡単にテレワークを選択できることはありそうもない。そのため、テレワークを独立変数として、満足度減少幅を従属変数として扱うことは妥当だと考えられる。

それに対し、コロナ禍による「社会とのつながり満足度の低下幅」とSNS利用やオンライン交流の関係は、簡単に因果の向きを指定できない。すでにみてきたように、低下幅が大きい人が自らの意思でインターネットによるつながりを求めることが容易に想像できるからである。

とはいえ、コロナ禍における社会的つながり満足度の低下という事態にインターネットが効果を持ちえたのかどうかについて、これまでの分析結果からは、すくなくとも次のことは推論できる。すなわち、コロナ禍において社会的つながりの満足度が低下したとき、少なからぬ人々がインターネットによるつながりをもとめたであろう。しかし、インターネットによるつながりによって満足度の低下が押しとどめられることはなかった。SNSを毎日利用する人とそうでない人との間で、満足度の差異はごくわずかにすぎず、オンライン発信・交流に至っては、取り組みの有無で満足度に有意差がなかった。いずれにせよ、今後より詳細な調査と分析が必要となるだろう。

5. 結 語

これまでみてきたように、コロナ禍は様々な満足度の低下を引き起こしていた。特に仕事の満足度については事務職に比べて、営業・販売やサービスの職にある者は満足度が低く、コロナ前と比較した場合の満足度の低下の幅も大きかった。そのようななかでも、テレワークが50%以上実施できた場合は、たとえ年齢・年収・従業上の地位やどのような職種であったとしても、それだけで仕事の満足度を上昇させることがわかった。コロナ禍という非常事態にでも、インターネットを含むメディアを活用した働き方を模索することは極めて重要だといえるだろう。

他方、社会とのつながりの満足度については、少なくとも本稿の分析結果からは、インターネットが十分な役割を果たせていない現状が浮き彫りになった。特にSNS利用とオンラインでの発信・交流の取り組みによって、満足度の低下を押しとどめることはできなかったようである。とはいえ、そのことをもってインターネットをむしろ利用しないという選択をすべきできないのも、また事実である。むしろ社会的つながりの満足度を低下させない利用方法を模索するという課題がより鮮明になったと考えることができる。それは、たとえCovid-19に対する集団免疫が獲得されたとしても、グローバル化したこんにちの世界では、新興感染症によるパンデミックの危険性は常に付きまとう以上、今後も長期的に取り組む必要のある課題である。あるいは自然災害や人災によって、社会生活を制限せざるを得ない事態もありうるだろう。いずれにせよ、社会的つながりに制限をかけなければならない事態に、インターネットがいかなる役割を果たしうるのか、今後さらなる検証が求められる。

引用文献

- Guan, Wei-jie, Zheng-yi Ni, Yu Hu, Wen-hua Liang, Chun-quan Ou, Jian-xing He, Lei Liu, Hong Shan, Chun-liang Lei, David S.C. Hui, Bin Du, Lan-juan Li, Guang Zeng, Kwok-Yung Yuen, Ru-chong Chen, Chun-li Tang, Tao Wang, Ping-yan Chen, Jie Xiang, Shi-yue Li, Jin-lin Wang, Zi-jing Liang, Yi-xiang Peng, Li Wei, Yong Liu, Ya-hua Hu, Peng Peng, Jian-ming Wang, Ji-yang Liu, Zhong Chen, Gang Li, Zhi-jian Zheng, Shao-qin Qiu, Jie Luo, Chang-jiang Ye, Shao-yong Zhu & Nan-shan Zhong, 2020, "Clinical Characteristics of Coronavirus Disease 2019 in China," *New England Journal of Medicine*, 382(18): 1708-20.
- He, Xi, Eric H. Y. Lau, Peng Wu, Xilong Deng, Jian Wang, Xinxin Hao, Yiu Chung Lau, Jessica Y. Wong, Yajuan Guan, Xinghua Tan, Xiaoneng Mo, Yanqing Chen, Baolin Liao, Weilie Chen, Fengyu Hu, Qing Zhang, Mingqiu Zhong, Yanrong Wu, Lingzhai Zhao, Fuchun Zhang, Benjamin J. Cowling, Fang Li & Gabriel M. Leung, 2020, "Temporal dynamics in viral shedding and transmissibility of COVID-19," *Nature Medicine*, 26(5): 672-5.
- 内閣府, 2020, 「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」(<https://www5.cao.go.jp/keizai2/manzoku/pdf/shiryō2.pdf>, 2020.6.29)